様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年　５月　２２日現在

機関番号：32689
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2011　～ 2012
課題番号：23820055
研究課題名（和文）　明治大正期の近松受容に関する研究

研究課題名（英文）　A study on Chikamatsu acceptance in the Meiji and Taisho era

研究代表者
小島智章　（KOJIMA TOMOAKI）
早稲田大学・演劇博物館・助手
研究者番号：10611147

研究成果の概要（和文）：

東西の主要機関が所蔵する文楽座員旧蔵の近松曲譜、及び上演資料（番組、劇評等）を調査収集し、上演資料目録データベースを作成。新たに発見した文楽関係資料を学界に紹介し、近松研究及び浄瑠璃研究と実演者との関わりについて考察した。また、明治期の近松受容に関する研究成果は、『坪内逍遙書簡集』の翻刻・注記執筆等に活かした。今後は、作成したデータベースを活用し、実演と研究両面について更に研究を進める予定である。

研究成果の概要（英文）：

I made a bibliographic database based on my researches of Chikamatsu-scores, which had been possessed by performers of Bunraku-za, programs and stage reviews owned by some major institutions. I also introduced newly found Bunraku-related materials and analyzed how performers had been related to the studies on Chikamatsu or Joruri on those days. Research results on Chikamatsu acceptance in the Meiji era was leveraged to reprint and write notes for *Letters by Tsubouchi Shoyo*. In future, I would advance my researches on both performance and studies about Bunraku, making the best use of the database I made.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２０１１年度	900,000	270,000	1170,000
２０１２年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
年度			
総　計	1,500,000	450,000	1,950,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：芸術学・芸術一般
キーワード：舞台芸術論

１．研究開始当初の背景

これまでの近松門左衛門研究は、主に「近世文学」「近世演劇」としての作者・作品研究が中心で、近松没後、今日に至るまでの上演史（及び改作史）研究は未だ充分に行われておらず、明治期以降の上演史に至っては殆ど閑却されたままとなっている。

また、これまで盛んに論じられてきた作品研究は、歴史的知識や古典文学の素養を持たない近現代人にも比較的共感の得られやすい短編の「世話物」に偏っており、全作品の約八割以上を占める「時代物」の研究が大きく遅れているのが現状である。

このような研究の偏りが起こった要因として考えられるのは、明治期最初の坪内逍遙らによる研究以来、西洋近代文学の評価基準（一貫した筋やテーマ性、登場人物の「性格」描写など）に比較的合致する「世話物」が高く評価される一方で、その基準に合致しない「時代物」や他の作者の作品が不当に低く評価されてきたことにあるだろう。

即ち、近代における演劇研究の出発点、作品評価の基準が近松の「世話物」にあったために、「時代物」の研究や近松没後の上演史（改作史）研究が遅れてしまったものと考えられる。

申請者はこれまでに、このような現状を打開して、新たな作品の「読み」や「評価」の可能性を探るため、明治期最初の坪内逍遙らの近松研究に関する考察や、明治期以降の上演史研究等を試みてきた。

本研究課題では、これまでの研究を更に発展させ、近代における近松受容・評価の多様性を、実際の上演を視野に入れつつ再評価し、近松作品をより深く味わい、評価するための方法論の確立を目指す。

２．研究の目的

本研究課題では、現在の近松評価の形成に直接繋がる明治期以降の近松受容・評価の歴史を、同時代資料に基づいて再検討し、西洋近代文学の評価基準に囚われない新たな作品の「読み」や「評価」の可能性を探るとともに、従来のような文学的作品研究のみならず、人形浄瑠璃（現行の「文楽」）や歌舞伎、新派、新劇等における上演やその評価を含めた、より総合的な「演劇」作品としての近松受容の歴史を再構築することを目的とする。

「近世」と「近代」、「演劇」と「文学」といった枠組みが未だ曖昧であった明治大正期の種々雑多な観客・読者の声に耳を傾け、特定の研究者や著名な作家、実演者らによる近松評価とは異なる、より幅広い近松受容の在り様を探り、比較検討することで、いわば「近代的」近松評価の問題点を探り、新たな可能性を探る点に本研究課題の大きな特色がある。

近松の流行が起こった明治中期から、多くの活字本が出版されて一般に普及し、文楽、歌舞伎、新派、新劇等での上演が試みられはじめる明治後期、学術的研究が本格化し、「文学」作品としての評価が定まる大正期と、順を追って見ていくことで、今日の近松評価の形成過程がより具体的に明らかとなり、「演劇」と「文学」が分化し、学術的研究の対象となった近松が「古典」となる、「近代化」の道程も見えてくるであろう。

近代における近松受容の多様な在り方を詳細に明らかにすることは、こと近松研究のみに留まらず、「演劇」や「文学」の本質を問い、現代における「古典」の価値を問うことにも繋がる極めて有意義な研究であると考える。

３．研究の方法

本研究課題の研究方法としては、まず、明治期以降の近松受容に関わる新聞、雑誌、書籍類を網羅的に調査し、今日の近松評価の形成に繋がる筋道を捉え直して、その問題点を明らかにするとともに、これまでの研究史で切り捨てられた種々雑多な近松論・近松評を再検討し、いわば「前近代的」な近松受容の在り様を探り、作品の新たな「読み」や「評価」の可能性を検討する。

また、現存する近松作品の譜本（譜入り台本）や上演資料類（番付類、劇評、芸談等）を可能な限り調査収集し、文学的作品受容や学術的研究と、実際の上演との関わり、影響関係について検討を行なうとともに、文学的評価とは異なる「演劇」作品としての評価の在り方についても検討する。

資料調査の対象となる主な機関は、早稲田大学演劇博物館、同大学図書館、同大学現代政治経済研究所をはじめ、国立国会図書館、都立中央図書館、国立劇場図書室、東京文化財研究所、大阪・国立文楽劇場図書室、大阪市立中央図書館、大阪府立中之島図書館、大阪音楽大学音楽博物館、京都府立総合資料館等で、なかでも特に、プロの文楽太夫の旧蔵譜入り浄瑠璃本の蔵書が充実している国立文楽劇場図書室、大阪市立中央図書館については、年間を通して繰り返し訪問調査し、全近松作品の調査、収集（写真撮影及び複写）を行なった。

以下、各年度毎に、具体的な研究方法について記す。

2011 年度前半期は、研究費の交付開始が遅かったため、早稲田大学内の各機関や都内の機関の資料調査を中心に行なった。
具体的な資料としては、「早稲田文学」「趣味」「芸術殿」等の早稲田大学関係の雑誌類で、これまでの研究では取り上げられていない作家や学者の近松評を悉皆調査し、内容の検討を行なった。
上演に関わる資料としては、演劇博物館が所蔵する近松曲譜の調査を行ない、「譜入り浄瑠璃本目録」を作成した。また、「浄瑠璃雑誌」「浄瑠璃世界」「浄瑠璃時報」等、これまでの学術的研究では殆んど言及されていない義太夫節・人形浄瑠璃（文楽）の専門雑誌を調査し、実演者の立場からの近松受容・評価の在り様を検討した。これらの雑誌から得られる実際の上演に関わる情報（番組、劇評、芸談等）は、「上演資料目録データベース」として蓄積し、今後の研究に役立てることとする。

2011 年度後半期は、前年度に演劇博物館に収蔵された「鴻池幸武・武智鉄二関係資料」の調査研究を行ない、近代の文楽史、浄瑠璃研究史双方にとって極めて重要な「鴻池幸武宛て豊竹山古靱書簡」の翻刻・紹介を行なった。また、本年、申請者が発見し、やはり演劇博物館に収蔵されることとなった「豊竹山城少掾旧蔵資料」の調査を行ない、その成果の一部を学界へ紹介した。
豊竹山城少掾（古靱太夫）は、近松作品を始めとする浄瑠璃関係資料の蒐集家・研究家でもあり、戦前から、研究者に資料・情報提供を行っていたことで知られているが、その蔵書は戦災で全て焼失し、資料内容の詳細や研究者との協力関係の実態は分からなくなってしまっていた。
今回発見した資料のなかには、戦前の蔵書目録や研究者に宛てた書簡、所蔵資料や演者の情報が詳細に書き入れられた年表類など、今後の近松研究及び浄瑠璃研究に不可欠な極めて貴重な資料が多数含まれていたため、当初の研究計画を若干変更し、近代の義太夫節、人形浄瑠璃（文楽）における近松作品の上演（改作、新作、復活上演を含む）に関する研究、並びに、山城少掾が近代の近松研究及び浄瑠璃研究に果たした役割について考察を中心に行なうこととした。

2012 年度前半期
前年度に引き続き、演劇博物館所蔵の山城少掾関係資料の調査、翻刻作業等を行なうとともに、戦後の山城少掾旧蔵浄瑠璃本（「山城少掾文庫」）を収蔵する国立文楽劇場図書室、プロの文楽演者の譜入り浄瑠璃（「人形浄瑠璃因協会所蔵浄瑠璃本」）を多数収蔵する大阪市立中央図書館の資料調査を行ない、山城少掾の浄瑠璃研究の具体的詳細、研究者・評論家との協力関係の実態について、考察を行なった。
また本年度前半期には、坪内逍遙、饗庭篁村という明治期最初の近松研究者に関するこれまでの研究成果を活かし、『坪内逍遙書簡集』第 1 巻（2013 年、早稲田大学出版部）所収「饗庭篁村」の項の翻刻・校訂・注記執筆に協力した。

2012 年度後半期
前半期に続いて山城少掾関係資料の調査、翻刻、関連資料データベースの作成を充実させることに加え、本年新たに発見された関西大学図書館所蔵の文楽関係資料の翻刻・紹介を行なった。
同資料は、明治から昭和期にかけて活躍した文楽の名人形遣い、吉田文五郎の座談会速記録で、
既存の刊行物には含まれていない内幕話などが記された極めて貴重な記録で、今後の文楽史研究にとって有意義な資料紹介であるとの高い評価を得た。

本研究期間内に行なった研究成果の一部は、2013 年秋に演劇博物館で開催を予定している「豊竹山城少掾展」の展示解説および図録の刊行で発表し、また、山城少掾以外の文楽における近松作品の上演史研究、関連資料データベースの作成も継続して行なう予定にしている。
今後更に、近代の近松受容史、上演史に関するデータベースの充実を図り、それを有効活用した研究発表を継続していくこととする。

４．研究成果

近代の近松受容史（研究史）上、最も影響力を持つとみられる坪内逍遙と饗庭篁村の近松研究を詳細に比較検討して、評価の在り方の相違点やその要因などについて考察を行なった。その研究成果の一部は、『坪内逍遙書簡集』（全 6 巻、2013 年 3 月、早稲田大学出版部）第 1 巻「饗庭篁村」の項の翻刻・校訂・注記執筆に活かしている。
近松作品の上演に関する研究では、東西の主要機関に所蔵される近松曲譜及び上演資料類（番付類、劇評、芸談等）を調査収集して、「上演資料目録データベース」を作成し、個別作品の曲譜の伝承や上演史に関する考察を行った。また、調査の過程で新たに発見した豊竹山城少掾関係資料を学界に紹介し、近代の近松研究及び浄瑠璃研究と実演者との関わり等について発表を行った。

近代文楽を代表する太夫・豊竹山城少掾は、戦前から、近松作品を始めとする浄瑠璃関係資料の蒐集家・研究家としても著名で、研究者に資料・情報提供を行っていたことでも知られているが、その全蔵書は戦災で焼失し、資料内容の詳細や研究者との協力関係の実態はこれまで明らかでなかった。今回発見した資料のなかには、戦前の蔵書目録や研究者に宛てた書簡、所蔵資料や演者の情報が詳細に書き入れられた年表類など、今後の近松研究及び浄瑠璃研究に不可欠な極めて貴重な資料が多数含まれている。同資料に関する調査研究は、本研究課題の期間終了後も継続しており、その成果の一部は、2013 年秋に早稲田大学演劇博物館で開催を予定している展覧会「豊竹山城少掾展」の展示解説及び図録刊行において発表する予定にしている。

また、2012 年度には、近代文楽の名人形遣い・吉田文五郎の未発表の座談会速記録を発見し、翻刻・紹介した。同資料は、座談会の場での速記メモを含む、より生の声に近い芸談の記録であり、既存の芸談には見られない話題も複数含まれている。本資料もまた山城少掾関係資料と同様に、今後の文楽研究にとって有意義な資料の発見・報告である。

本研究課題の期間中に新発見した豊竹山城少掾関係資料の調査研究を優先したため、当初予定していた課題の

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）

① 小島智章・児玉竜一・原田真澄、「鴻池幸武宛て豊竹古靭太夫書簡二十三通―鴻池幸武・武智鉄二関係資料から―」、演劇研究、査読有、第 35 号、2011、1―36
② 笹川慶子・小島智章、「吉田文五郎師座談会速記―関西大学図書館蔵「永井克也コレクション」より―」、大阪都市遺産研究、査読有、第 3 号、2013、75－94

〔学会発表〕（計１件）

① 小島智章、二世豊竹古靭太夫（山城少掾）所蔵浄瑠璃本目録について、歌舞伎学会秋季大会、2011

〔図書〕（計１件）

① 逍遙協会編、早稲田大学出版部、坪内逍遙書簡集 第１巻（「饗庭与三郎（篁村）」の項）、2013、1－46

６．研究組織
(1)研究代表者
小島　智章（KOJIMA TOMOAKI）

研究者番号：106 11147

(2)研究分担者
なし　　（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
なし　　（　　）

研究者番号：